減

7 簡易水道

自分たちで守りたい

山あいに村役場、食堂に旅館、製材所もあった。戦後の木材需要に沸く旧遊子川村の中心部に三瀬逸雄さん(五九)は生まれ育った。「一家に四、五人の子どもはざら。保育園と小中学校の合同運動会はいっぱいの人で迷子になるくらい」

四村が合併した一九五四年、西予市城川町遊子谷の日浦地区に、いち早く簡易水道が整備された。「先輩はすごい。いまも通用してますから」。日浦水道組合長の三瀬さんは現役で活躍する水道を誇りに思う。計画給水人口三百人。右肩上がりが予想される活況だった。半世紀がたち、給水人口は五十人を切った。

西予市役所の会議室。上下水道課長の西谷博志さん(五七)が色分けされた市全図を広げる。「これだけ水道事業があるんです」。ため息が交じる。宇和海から大野ケ原に至る西予市には計画給水人口五千人超の上水道四、百一―五千人の簡易水道四十、小規模なものを加えると百十六に上る。

国は二〇〇七年度から、簡易水道の補助制度を見直した。市町に〇九年度までに経営・管理の統合計画策定を求め、統合しない場合は老朽化施設への更新補助金を出さない、との「罰」を用意する。「水道事業は料金収入で賄う」との筋論を通せば、低料金で運営してきた地方の簡易水道は値上げを避けられない。

一市町村一事業での効率化を目指す国の方針に西谷さんは頭を痛める。「配管効率が悪く、人口減で収入も減っている。経営効率を言われても都会のようには…」。だが老朽化は容赦なく進む。同市では十立方㍍を使用した場合、地区によって百円から二千二百円まで開きがある。統一となれば住民の反発は必至だ。

この話はまだ、三瀬さんの耳に届いていなかった。「統合?」。しばらくの沈黙。「抵抗感は強いですよ。自分たちでつくり、管理してきた水道ですから」

大雨で水が濁るのは当たり前と許容してきた。水源の確保。ろ過池の砂洗い、塩素消毒の薬品補充、すべて住民が担う。当たり前にきれいな水が飲める上水道とは全く異なる。下流域も恩恵を受ける水源の森を守ってきた自負もある。

三瀬さんは林業不振の中で「林業なんかやめてしまえよ」と友人から言われてきた。それでも信念を持ち続けた。「豊かな山があるから水が安定する。手入れすれば保水力は抜群。表土を止め、草木の根が雨水を蓄え、浄化してくれる。林業はなくならない」

間伐など森林整備を請け負う「エフシー」を立ち上げて十三年。環境問題が注目され始め、林業への追い風を感じる。五人で始めた会社は社員三十四人になった。担い手の育成にも力を注ぐ。「限界集落? そう簡単にはくたばらないですよ。田舎はね、土俵際の粘り腰があるんですよ」。水とふるさとを守りたい―。

(社会部・奥村健)

若い林業の担い手に作業を教える三瀬逸雄さん(左)。森林整備が安定した水を支え、ふるさとを支えるという信念を持ち続けている=2006年9月、西予市城川町

えひめ 水は語る 第1部

愛媛新聞社

掲載番号 G20080801-00212